



キャンパス/茨城県水戸市、日立市、稲敷郡阿見町 学生数/8,022人 創立/1949年
 教育方針/ディプロマ・ポリシーで定めた資質・能力を軸に、学修者の達成・活用の実感を高めることを重視した教学マネジメントを進める。2024年4月にはコア教育を取り入れた地域未来共創学環を新設するなど、学内外のステークホルダーとの共創教育体制の構築にも力を入れる。
 学部/人文社会科学、教育、理、工、農 大学院/人文社会科学、教育学、理工学、農学
 THE世界大学ランキング2024/1501+位、同日本大学ランキング2023/101-110位、同インバウトランキング2023/301-400位



5つのDP達成を約束し 組織的に学生の成長実感を把握

茨城大学

学修者本位の教育の実現に向け、「学生が成長実感を持ち、DPを達成」という目標に挑戦する茨城大学。質保証の体制づくり、データの活用について学長に聞く。



学長 太田 寛行

おおたひろゆき ●1982年東北大学大学院農学研究科博士後期課程修了。岡山大学歯学部助教授を経て、1997年茨城大学農学部助教授、2002年同学部教授。農学部長・農学研究科長、副学長（大学戦略・IR）、理事、副学長（教育統括）を歴任し、2020年より現職。

「個」の質保証から「チーム」の質保証へ

本学は教育重視の大学です。早くから各教員が授業アンケートを実施し、授業点検・改善を行ってきました。しかし、これは個人レベルの努力であり、全学的な質保証とは言えません。学修者本位を実現するには、「学生がDPに示された力を理解し、その達成度を把握できるしくみ」を大学全体で機能させることが不可欠です。そこで、質保証を「個」から「チーム」の取り組みへとシフト。教員・学科・学部・大学全体の4階層で、教育の点検・改善を図る体制を構築しました。

階層を明確にすると、現場で対処しきれない問題の解決が図れます。例えば、学生の成績が振るわない科目があったとします。その授業内容を理解するために必要な

DP達成度を確認し 教育改善につなぐ

知識を得る科目が設けられていなければ、それは教員ではなくカリキュラムの問題です。教員から上位の階層に報告するので、教育全体が改善されるようになります。

学科レベルでは、年に2回程度、成績評価やアンケート、学生調査の結果を見ながら議論する会議を設けています。教員はシラバスを見せ合ったり、学生のデータを見ながら改善案を検討したりしています。大学側はデータの使い方を強制することはなく、「何かおかしいことに気づいたら、データも活用して議論してください」といったスタンス。現場での合意を重視した改善行動を促しています。

学生本人の「成長実感」が「学修者本位」の教育の鍵だと考えます。そのため、「茨城大学型基盤学力」と呼ぶ5つのDPをについて、入学式後に行うコミットメント・セレモニーでもDP紹介の演出に力を入れ、意識を高めます。そして、入学時、在学時、卒業時にDPの達成度をアンケート調査し、学年が進むごとの学生の成長実感を把握しています。

新入生調査では志望理由や実際

の大学の印象に加え、5つのDPの理解度を確認します。2〜4年次の在学生調査では、DPを細分化した項目ごとに、その達成度を4段階で自己評価させます。卒業時には最終的なDP達成度を、さらに卒業3年後には「DPに基づく力が社会で役立っているか」を問います。これらの学生本人の主観的な評価に、成績評価等の客観データや、地元企業への卒業生評価アンケートを加えて、DPに掲げた力の習得・活用度を分析し、教育改善に生かしています。

その結果、学生の卒業時のDP達成度の平均値が年々上昇するなど、組織的な質保証の取り組みは成果を上げつつあります。

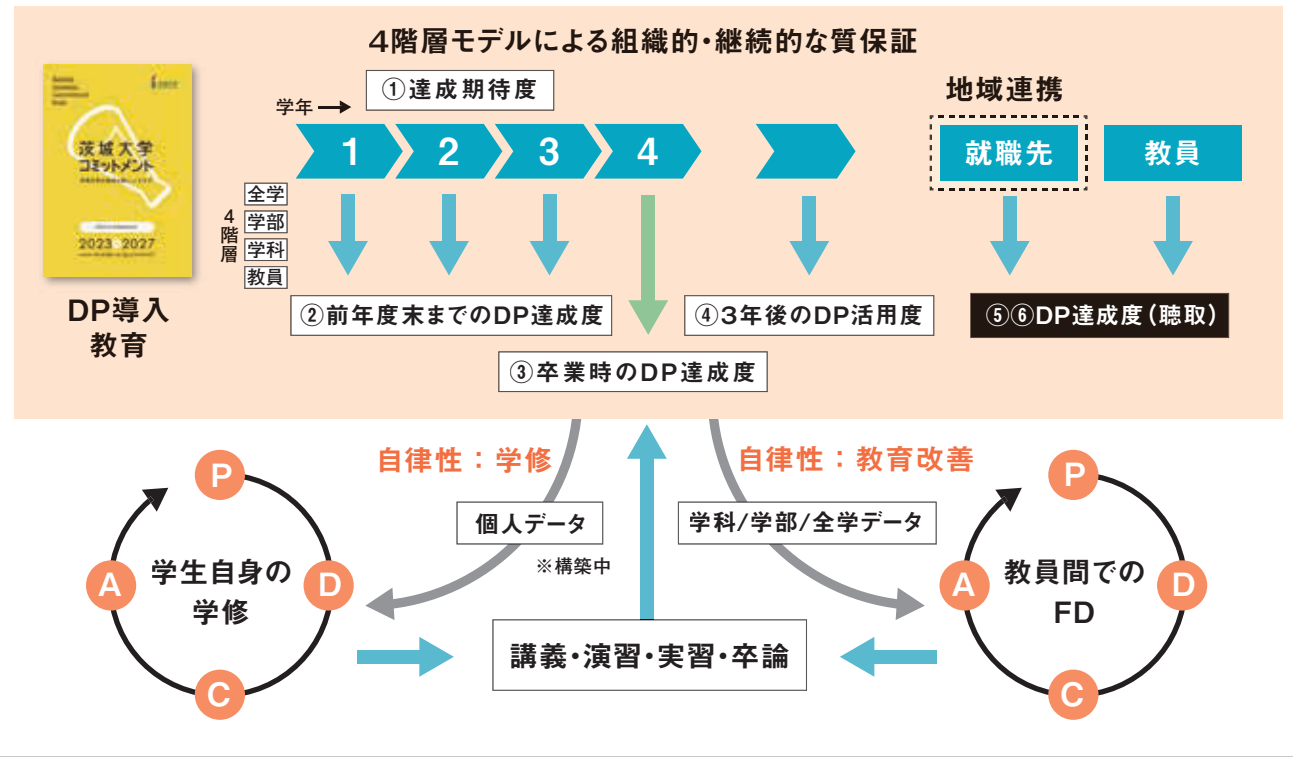
次なる課題は、学生本人がDPの達成度や学修成果を閲覧するシステムの構築です。本来、学びの履歴情報は、学生本人のもの。学生自身が折々の学修成果を理解し、次の成長につなげられるよう、ルーブリックの開発やLMSの整備などを早急に進めていきます。

学生が成長実感を持てる「学修者本位」の教育への取り組みは、持続性が重要です。これまでIRの教職員の働きに頼る面がありましたが、今後は、より組織的な質保証のマネジメント体制を整えていく考えです。

DP

- 1.世界の俯瞰的理解
自然環境、国際社会、人間と多様な文化に対する幅広い知識と俯瞰的な理解
- 2.専門分野の学力
専門職業人としての知識・技能及び専門分野における十分な見識
- 3.課題解決能力・コミュニケーション力
グローバル化が進む地域や職域において、多様な人々と協働して課題解決していくための思考力・判断力・表現力、及び実践的英語能力を含むコミュニケーション力
- 4.社会人としての姿勢
社会の持続的な発展に貢献できる職業人としての意欲と倫理観、主体性
- 5.地域活性化志向
茨城をはじめとする地域の活性化に自ら進んで取り組み、貢献する積極性

DP達成度を軸にした質保証の推進



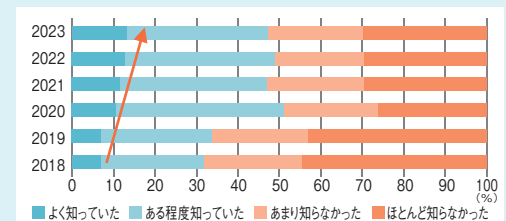
注目

全学生が身に付ける力を約束する「茨城大学コミットメント」の浸透

茨城大学では、2017年から「茨城大学のすべての教育が、DPにつながっている」ことを「茨城大学コミットメント」として示し、コミットメント・パートナーである学生、教職員、地域の人々にそれを約束している。学生目線で、同大学の教育と質保証をわかりやすくまとめた小冊子を新入生に配付。入学式後にセレモニーを開いて、5つの茨城大学型基盤学力(=DP)を解説し、「4年間で具体的にどのような力をつけるべきか」を意識させている。発案者である広報室の山崎一希氏は、「進学理由が『国立だから』『共通テストの結果から』という学生が少なからずいる。スタートの段階が肝心。セレモニーは4年後の理想の姿から逆算して、『何を学ぶのか』を考えるイベントだ」と、趣旨を語る。

DPは、入学前セルフラーニングや1年次前期の「大学入門ゼミ」でも説明するほか、浸透を図るために集中講義「みんなの“イバダイ学”」を開講。受験前の認知強化にも力を入れ、高校訪問や学校説明会の際に紹介している。それらが功を奏し、DPを理解した状態で入学する学生が増加していると言う。

【図表】DPに基づいた教育について「よく知っていた」と答えた入学者が徐々に増加



(写真左)入学式後のセレモニーで5つのDPを紹介。(写真右)学生側の視点で茨城大学の学びを解説したコミットメントブック。